

第3講

教育理論とカリキュラム

田中 康平
株式会社NEL&M
教育情報化コーディネータ

学修到達目標

- ① 主要な教育理論（行動主義、認知主義、構成主義など）を理解し、それぞれの理論の特徴や学習に対するアプローチを具体的に説明できる。
- ② 特定の教育理論に基づいて、学習者のニーズや社会的 requirement を考慮したカリキュラムを設計し、その内容や指導方法を具体的に示すことができる。
- ③ 教育理論がカリキュラムにどのように影響を与えるかを分析し、具体的な事例を挙げてその関連性を論じることができる。

はじめに

教育理論とは、学習者がどのように学び、知識を獲得するのかを示すモデルや枠組みを提供するものである。教育理論の理解は、教師が有効な指導方法や学習活動を検討し実践することを支援する。

平成28年度に公示された学習指導要領では、以下が示された

- ・教育課程の理念：「社会に開かれた教育課程」
- ・授業改善の方向性：「主体的・対話的で深い学びの実現」
- ・学習の基盤となる資質能力：言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等

一方で、「学習指導要領の内容が分かり難い」との声もあり、背景となる教育理論やその内容などが理解されていない実情が見られる。

教育理論の理解が十分ではない場合

具体的な方略を描くことが難しくなる

- ・主体的・対話的で深い学びの具体的な姿はどのようなものなのか
- ・深い学びとはどのように捉えると良いのか
- ・学習評価についてどのような工夫が必要なのか
- ・情報活用能力をどの学習活動の中で育成するのか

本講の目的

「学習パラダイム」と呼ばれる教育理論について、学習観、教師の役割、評価方法、関連する理論などの特徴を概説し、「学びをデザインする高度専門職としての教師」の足場がけに寄与する。

1. 学習パラダイムの特徴

学習観の転換に働きかけてきた、4つのパラダイムと、DX時代の考え方

- 1.1 行動主義
- 1.2 認知主義
- 1.3 構成主義
- 1.4 社会構成主義
- 1.5 コネクティビズム

これらの特徴について、学習観・教師の役割・学習活動・評価方法・関連理論を整理し、概説する。

1.1 行動主義

学習観：外部刺激への反応による観察可能な行動変容。正しい反応が強化されることで学習が成立する。

教師の役割：知識の伝達者、行動強化の管理者、学習環境の制御者

主な学習活動：ドリル学習、プログラム学習、反復練習、暗記学習など

主な評価方法：客観テスト、行動目標の達成度測定、正誤判定による点数化など

関連理論：オペラント条件づけ、行動目標論、マスタリーラーニング、CAIなど

※年代的には最も古いパラダイムであるが、現在も実践されている学習活動や評価方法として根強いものがある。

1.2 認知主義

学習観：情報処理プロセスとしての学習。知識の獲得と構造化を通じて内的な認知構造が変化する過程と捉える。

教師の役割：情報の構造化と提示者、思考プロセスの支援者、学習方略のモデル提供者

主な学習活動：概念マップ作成、問題解決演習、思考スキルの練習、メタ認知の育成など

主な評価方法：理解度テスト、概念理解の評価、思考プロセスの評価など

関連理論：Bloom's Taxonomy、スキーマ理論、認知負荷理論、ガニエの9教授事象など

※「単元テスト」や「到達度評価」の起源は認知主義に遡る。

1.3 構成主義

学習観：学習者が経験に基づいて能動的に知識を構成するプロセス。個人の既有知識に基づく意味の構築と捉える。

教師の役割：学習環境デザイナー、学習の促進者、問い合わせの提供者

主な学習活動：探究学習、問題解決学習、プロジェクト学習、体験を通した学びなど

主な評価方法：パフォーマンス評価、真正の評価、ポートフォリオ、形成的評価など

関連理論：改訂版Bloom's Taxonomy、自己調整学習、形成的評価、逆向き設計（Backward Design）など

※現在の学習指導要領が求める教育実践に通ずるもの。

1.4 社会構成主義

学習観：社会的相互作用と協働を通じた知識の共同構築。文化的・社会的文脈が学習に影響すると考える。

教師の役割：足場かけ（スキャフォールディング）提供者、学習コミュニティのファシリテーター、対話・交流の促進者

主な学習活動：協調学習、ディスカッション、知識構成型ジグソー法、相互教授法など

主な評価方法：協働プロセスの評価、相互評価、ルーブリック活用、対話を通した評価など

関連理論：状況的学習論、認知的徒弟制、UDL、TPACKモデルなど

※「主体的・対話的で深い学び」の理論的基盤となる。

1.5 コネクティビズム

(社会構成主義と関連したデジタル学習基盤を活用した考え方)

学習観：ネットワーク内の知識源との接続と関係性の構築。変化する情報環境での適応的な知識形成を志向する。

教師の役割：ネットワーク構築支援者、知識のキュレーター、学習コーチ・アドバイザー

主な学習活動：デジタルリソースの活用、SNSを通じた協働、MOOC参加、マイクロラーニングなど

主な評価方法：学習分析、形成的評価、デジタルポートフォリオ、リアルタイムフィードバックなど

関連理論：Networked Learning、Digital Taxonomy、CSCL、Actor-Network Theoryなど

2. 各パラダイムの実践展開について

各学習パラダイムは、異なる学習観、教師の役割、学習活動、評価方法を提唱している。

行動主義：知識伝達者としての教師、ドリル・暗記学習、テスト・行動観察による評価

認知主義：構造化・思考支援、概念マップ・問題解決、単元テスト・到達度評価

構成主義：環境デザイナー・ファシリテーター、問題解決・探究活動、パフォーマンス評価・ポートフォリオ

社会構成主義：対話的ファシリテーター、協働学習・対話的活動・PBL、形成的評価・相互評価・ループリック

※年代的に古いパラダイムでも、現在も実践されている活動・評価方法がある。

3. 学習指導要領との関連

- 3.1 「主体的・対話的で深い学び」との関連
- 3.2 「社会に開かれた教育課程」との関連
- 3.3 情報活用能力の育成、デジタル学習基盤の効果的な活用との関連

3.1 「主体的・対話的で深い学び」との関連

現行の学習指導要領が示す「主体的・対話的で深い学び」は、社会構成主義パラダイムに基づくものだと考えられる。

「主体的」：学習者を主語とした捉え方であり、能動的に知識を構築するプロセス

→ 構成主義の「学習者による知識の能動的な構築」に対応

「対話的」：他者との相互作用を通じた学習

→ 社会構成主義の「協働と相互作用」に対応

「深い学び」：表面的な知識習得ではなく、意味や関連性を理解し、高次の認知過程を経由する学習

→ 改訂版Bloom's Taxonomyの高次思考に対応

3.2 「社会に開かれた教育課程」との関連

「社会に開かれた教育課程」の考えは、社会構成主義（およびコネクティビズム）のパラダイムと関連する。

社会構成主義の視点：

「文化的・社会的文脈が学習に影響する」と捉える。学習内容を実社会の文脈と接続することで学習の質が高まる。

コネクティビズムの視点：

学習を「ネットワーク内の知識源との接続」と捉える。学校外の専門家、地域社会、デジタルリソースとの接続により、対話の多様性が拡張される。

→ より探究が深まり、本質的な問題発見や解決能力の育成に繋がると考えられる。

3.3 情報活用能力の育成とデジタル学習基盤

学習指導要領では「情報活用能力」が学習の基盤となる資質・能力として明記された。GIGAスクール構想により1人1台端末環境を中心とした「デジタル学習基盤」が整備された現在、これらの能力をどの学習活動で育成するかが課題となっている。

表1：学習パラダイムとICT活用・学習活動

学習パラダイム	ICT活用の方向性	学習活動の例
行動主義	反復練習・即時フィードバック	AIドリル
認知主義	思考の可視化・構造化支援	概念マップツール
構成主義	探究・創造活動の支援	デジタル制作
社会構成主義	協働・対話の促進	CSCL、協働編集
コネクティビズム	ネットワーク構築・情報活用	デジタルリソース活用

依拠する学習パラダイムの視点を持つことで、学習目標に対応したICT活用の方向性を明確にすることができます。

4. 教師の専門性構築に向けて

4.1 教師の役割の転換

4.2 教育理論共有の重要性

4.3 教師の専門性の継続的な発展

4.1 教師の役割の転換

学習パラダイムの変遷は、教師の役割の転換を求めている。

行動主義：教師は「知識伝達者」（教師中心の指導）



社会構成主義：教師は「ファシリテーター」（学習者中心の支援）

社会構成主義では、教師は学習コミュニティを構築し、対話的にファシリテートする者へと変わる。

この役割の転換は、学習指導要領が求める教師の授業観や評価観の変化を考える足場となる。

4.2 教育理論共有の重要性

課題：同じ学校の中で、異なるパラダイムに基づいて教育実践が行われている場合、学習者の経験は一貫性を欠くことになる。

解決策：学習パラダイムの発展過程を学校全体で共有することで、教育実践や授業改善に一貫性を持たせることができる。

期待される効果：児童生徒を主語とした「主体的・対話的で深い学び」の促進

「社会に開かれた教育課程」の基盤形成

「情報活用能力の育成」の推進

4.3 教師の専門性の継続的な発展

学習パラダイムの理論的理解に基づいて実践を改善することで、児童生徒の資質・能力の高まりをもたらすことが期待される。

教師が理論的根拠を持つことで、授業設計や評価の工夫がより具体的で有効になる。

教育理論の理解は、教師の高度な専門性の構築と継続的な改善の基盤となる。

教育DXに向けたパラダイムシフトの時代において、教師が自らの実践を省察し改善していく足場には、理論と実践の統合があり、これにより教師の専門性が絶えず磨き続けられるものだと考える。

参考文献

[1] 文部科学省, 学習指導要領「生きる力」, 2017.

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm

[2] 文部科学省, 中央教育審議会, 教育課程部会 教育課程企画特別部会における論点整理について, 2025.

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/101/index.html

※学習パラダイムについては、以下の文献を参考に記載。

Predrag Pale, Juraj Petrovic, and Branko Jeren, Learning Theories,

<https://learning-theories.org/doku.php>